



## 湾岸・アラビア半島地域ニュース

### バハレーン：GCC 諸国への投機資金流入によるインフレ懸念

(11月7日付「ガルフ・デイリー・ニュース」紙)

スタンダードチャータード銀行のマリオス地域調査担当の分析。

1. 湾岸地域のインフレ率は、10 数年来のレベルに達している。過去 5 年間に 4 倍にもなった原油価格の高騰による経済ブームと、住宅・事務所の供給不足が原因である。
2. 住宅市場での供給難は、供給量の増加に伴い近く解消されるであろう。問題は資金流入の大量さ且つ迅速さであり、何らかの規制が必要である。
3. 米ドルは記録的な安値となっており、投資家は、湾岸諸国の中で対ドル・レートを切り上げざるを得ない国が出てくるのではないかとの思惑から、主にサウジアラビア、カタール、UAE の資産に資金をつぎ込んでいる。9 月 18 日に行われた米国連邦準備制度の利下げにサウジアラビアが同調しなかった際、市場はサウジアラビアで通貨政策の変更に対する準備が整ったと見なし、サウジ・リヤルに買いが殺到し、同通貨を 21 年ぶりの高値に押し上げた。
4. こうした投機的資金の動きに加え、高油価、国内信用市場の成長の影響もあり、将来のインフレの指標である資金供給増加率は上がり続けている。カタール、UAE における 2006 年の資金供給は、対前年比で各々 40%、20% 増加した。クウェイトでは今年 7 月、13 年ぶりに資金供給量の記録を更新した。又、サウジアラビアでは同月、3 年ぶりに高い水準の資金供給量となった。クウェイトはドルペッグ制を放棄し、自国通貨のディナールをバスケット通貨にリンクさせる政策に変更した。
5. 湾岸諸国に資金が流入する背景には、この地域には独立した通貨政策が存在しないため、資金流入に対応出来ないという理由もある。そして、この通貨政策の欠如こそが、今後の湾岸地域における最大のリスクであり、ドルペッグ制の維持に対する重圧となるだろう。
6. サウジアラビアの中央銀行は、先週、市中銀行の現金預入率を 27 年ぶりに引き上げた。米国の利下げに応じて行った貸出コストの引き下げがインフレを加速させることを抑えるのがその目的である。市中銀行が預金高に応じて中央銀行現金預入率を 7% から 9% に引き上げることにより、120 億リヤル (約 32 億米ドル) の現金を市中から引き上げることが出来るであろう。